

# 戦前・南洋の日本人町を歩く

## マニラ麻を支えたダバオの日本人たち(上)

作家

太田尚樹

●おた・なおき 1941年生まれ。東海大学名誉教授（スペイン文明史、比較文明論）。スペインに関する著作から昭和史を発掘するノンフィクションまで、幅広く執筆。最新刊は『尾崎秀実とソルゲ事件』。

### ダバオの開発と太田商店

「雨季といっても、ダバオでは夕方から夜にかけて時折りにわか雨が降る程度で、朝はすっきりと晴れ渡り、

日中も晴れか薄日が差している。日本の梅雨のようにジメジメしたり、蒸し暑くないから、むしろすがすがしい感じがする。

「年によって違います  
が、今年も平年並みと



いうところですか？ 四年ほど前に、北部が襲われて、ココナツや果物の木が大きな被害を受けましたが、台風の進路ではないので、来ることはめずらしいです」

この地に住んで十五年になる渡辺光男さん（仮名・七十五歳）が言った。

小さな島嶼を除けば、ミンダナオ島はフィリピン群島のなかでも二番目に大きい最南端に位置する島で、ダバオは南に広がる大都市である。

「年金でリツチに暮らせるダバオ」の情報に、家電メーカーを早期退職すると、夫婦で移り住んだ渡辺さんたちは、この地が気に入っている。

「マニラやセブの日本人ロング・ステイヤーのなかの

す」という。

ダバオに日本人町ができたのは、マニラに居住する日本人実業家・太田恭三郎（兵庫県出身）が、広大なミンダナオ島の開発に目をつけたことにはじまった。

太田は土地開発事業の認可をアメリカ植民地政府から取り付け、大規模なアバカ（マニラ麻）とココナツのプランテーションの開拓がはじまったのが、先の明治三十六年（一九〇三）という年である。

この年は日露戦争勃発の一年前で、ダイナミズムの明治という時代の後半にあたる。欧米を手本にした文明開化の時代から、近隣諸国を視野に入れた膨張主義へと移行する胎動が、日本国内に芽吹きはじめた時代でもある。国家をあげて朝鮮半島、満州を視野に入れた行動が日露戦争の背景とすれば、一方で、民間レベルでは南洋に目を向ける者が現れた。

なかでも沖縄は、近代文明に見合った産業がなかったが、潜在的に外向きの志向があったということでもある。

先の太田は沖縄県人ではないが、南方進出の日本人リーダーとなったことは、時代が求めていたパイオニアの出現ということになる。

永住組は、せいぜい二〇パーセント前後ですが、ダバオの場合は四〇パーセントを超えています。物価も安いし、気候も良くて住みやすいからです。それに治安も驚異的に良くなりましたから。

なにしろこのドゥテルテ市長（現フィリピン大統領）は、麻薬関係者、強盗などを正規の裁判にかけずに、みんな銃殺してしまい、その数は千人を超えているそうです。お陰で安全ですから、わたしたちは毎日ゴルフと釣り三昧の日々です」

この渡辺さんの紹介で、わたしは神里英夫さん（仮名・六十八歳、在比十七年）と知り合ったのだが、日本から取材にきた人やロングステイ希望者を、ボランティアで案内している。

ダバオは市域でもマニラに次ぐ大都市だが、マニラのように、江戸時代前から日本との交易や日本人町があったわけではない。

先祖が沖縄出身という神里さんによると、「それでも、明治三十六年（一九〇三）から、終戦の年まで、戦前から日本とのつながりが深かった街です。町もそうです。ダバオ港は南洋材の積出港と、マニラ麻で編んだロープの需要が急増したお陰で、栄えたので